

## 2020年3月期 第2四半期 決算説明会における質疑応答

### 開催概要

- 【日 時】 2019年11月13日（水）13：30～14：35  
【場 所】 株式会社ゼンリン 東京本社（ワテラストワー12階）  
【出席者】 代表取締役社長 高山 善司  
代表取締役副社長 網田 純也  
執行役員 コーポレート本部長 戸島 由美子

### 質疑応答概要

以下は、質疑応答の概要をまとめたものです。

- Q1： 来期に向けた業績の方向感を確認したい。オートモーティブ事業は少なくとも横ばいで、プロダクト事業や公共ソリューション事業のストック型商品をベースに伸ばしていくという考え方でよいか。
- A1： プロダクト事業は商品開発が順調に進んでおり、今年度後半から市場投入する予定ではあるが、営業リソースの問題があり、本腰を入れられるのは来期と想定している。オートモーティブ事業は、中長期経営計画（ZGP25）のファーストステージにおいてはフロー型ビジネスが継続するとみており、その間、プロダクト事業、公共ソリューション事業におけるストック型ビジネスの拡大に努める。
- Q2： 説明にあった、GISパッケージの単価の引き上げや顧客層拡大のスケジュール感、想定する成長ペースを教えてください。
- A2： GISパッケージの新サービスは、新規開発ではなく機能追加であり、価格戦略やエリア戦略も含め、市場投入にそれほど時間はかからないとみている。実際に試験的な営業は始めており、来期から本格的に展開したい。
- Q3： DiDi モビリティジャパンとのアライアンスの発表があったが、今後も MaaS 分野などにおいて、ゼンリンの地図を直接使用したいという企業ニーズは強くなると思われる。今後もこのようなアライアンス案件は増加すると見込んでいるか？ その際のゼンリンの強みや課題などがあれば教えてください。
- A3： 当社の精度の高い地図が評価され、外資系も含め非常に多くの企業から引き合いをいただいている。しかし業界・業種は多様で、コンテンツのニーズもそれぞれ異なるため、全てに対応していくのは難しい部分もある。当社としては AI 技術の活用など情報収集・データベース整備を効率化し、多様なニーズに対応していくことが課題と考えている。
- Q4： さまざまな企業とアライアンスを組むことについて、支障はないか？
- A4： 当社は以前から全方位型で多くの企業と協業しており、今後も各社ときちんに対応していく。

- Q5 : 下期の営業利益は 20%の増益になるが、昨年第 4 四半期から 4 四半期連続で減益が続いている中、下期増益に転じるとしている背景は何か？ 未達になるリスク要因があるとしたら何か？
- A5 : 未達のリスク要因として最も予想が困難なのは、顧客都合や市場環境など外部要因の影響を受けやすいオートモーティブ事業。IoT 事業も比較的順調にアライアンス等が進捗しているが、ビジネスの立ち上がりが遅延気味になる傾向がある。一方、当社で商品開発をして市場に投入できるプロダクト事業や公共ソリューション事業は利益も大きく、自社でコントロールできるので予想もぶれにくい。この 2 事業でリスクヘッジしながら、利益もしっかり確保していきたい。
- Q6 : Google マップはゼンリンのデータを完全に使用しなくなったと思われるが、下期における IoT 事業の業績に対するインパクトを教えてください。また、Google への提供のように、地図の基盤を提供するビジネスは、今後はそれほど大きな成長は見込めないで、アプリケーション特化型ビジネスへの地図提供を拡大していくとのことだが、各案件は小規模になるように思われる。それらが規模として大きく立ち上がり、収益に貢献するタイミングはいつ頃と想定しているのか？
- A6 : Google の件に関しては、下期業績に対する影響はあるが、個別の契約内容になるので規模等詳細の公表は差し控える。ただし全く取引がなくなったということではなく、コンテンツの提案は続ける。  
また、地図の基盤提供に関して、先に説明したのは、汎用的な地図プラットフォームでは課金できない状況になってきているという意味である。アプリケーション特化型への注力とは、その利用用途に対応できるコンテンツ・情報基盤の提供を強化していくということであり、例えば他社が提供する API よりも、さらに利便性を高めた API を当社が提供するなど、研究開発も進めている。
- Q7 : 自動運転ビジネスは現在谷間だということだが、一般道の自動運転に関して、立ち上げ時期や規模感など、状況にアップデートがあれば教えてください。
- A7 : 一般道については、自動運転よりも先に、運転支援（ADAS）を強化する流れになっている。当社としても、ナビデータに ADAS のコンテンツを付与していくか、それとも高精度地図として生成していくかも検討が必要だが、どちらでも対応できる体制は整えている。今期から来期にかけては、ナビデータに対する新たな ADAS コンテンツの追加需要が多い。いずれは一般道でも自動運転は普及していくと思われるが、現時点では法律なども含め未確定の事項が多く、当面は運転支援での対応が優先になると想定している。
- Q8 : 5G の普及に対するゼンリンの計画・ビジネス展望を教えてください。
- A8 : 5G によって、事業環境は格段に変化すると予想している。大容量の地図データもダウンロードという概念がなくなるほど高速になる。現時点でまだ具体的な商品等はお伝えできないが、可能性は大きく、5G を活用した新しい商品開発には積極的に取り組んでいきたい。
- Q9 : GIS パッケージについて、不動産向け以外は何かあるのか？
- A9 : 現在、不動産、建設、不動産鑑定士、税理士の 4 種類があるが、その他の業種パッケージの投入が少し遅れている。業種に特化すると市場規模が小さくなるため、新たな業種・業務パッケージとするか、機能追加とするかなど、判断が難しい部分はあるが、パッケージの種類を拡大していく方針に変更はない。

以上